

知床半島 カシユニの滝

写真・文 志水哲也

知床最大の魅力は、オホーツク海側に続く大岩壁群だ。知床半島の海岸線は険しい海蝕断崖が続くが、特にオホーツク海側は冬期に流水が接岸して、海岸を削り取るために断壁が連続する特異な地形をなす。流水は遠くシベリア大陸からやってくる。シベリアで生まれた水が、海を白い大陸と変えながら、押し寄せ、知床半島にぶつかってこの岩壁群を造る。

その真っ只中にかかる優美な滝がある。カシユニの滝は滝壺がオホーツク海である。知床岳1254mを源にもつチャラセナイ川の水がオーバーハングした断壁から一直線に落ち、海面に突き刺さる。

Profile

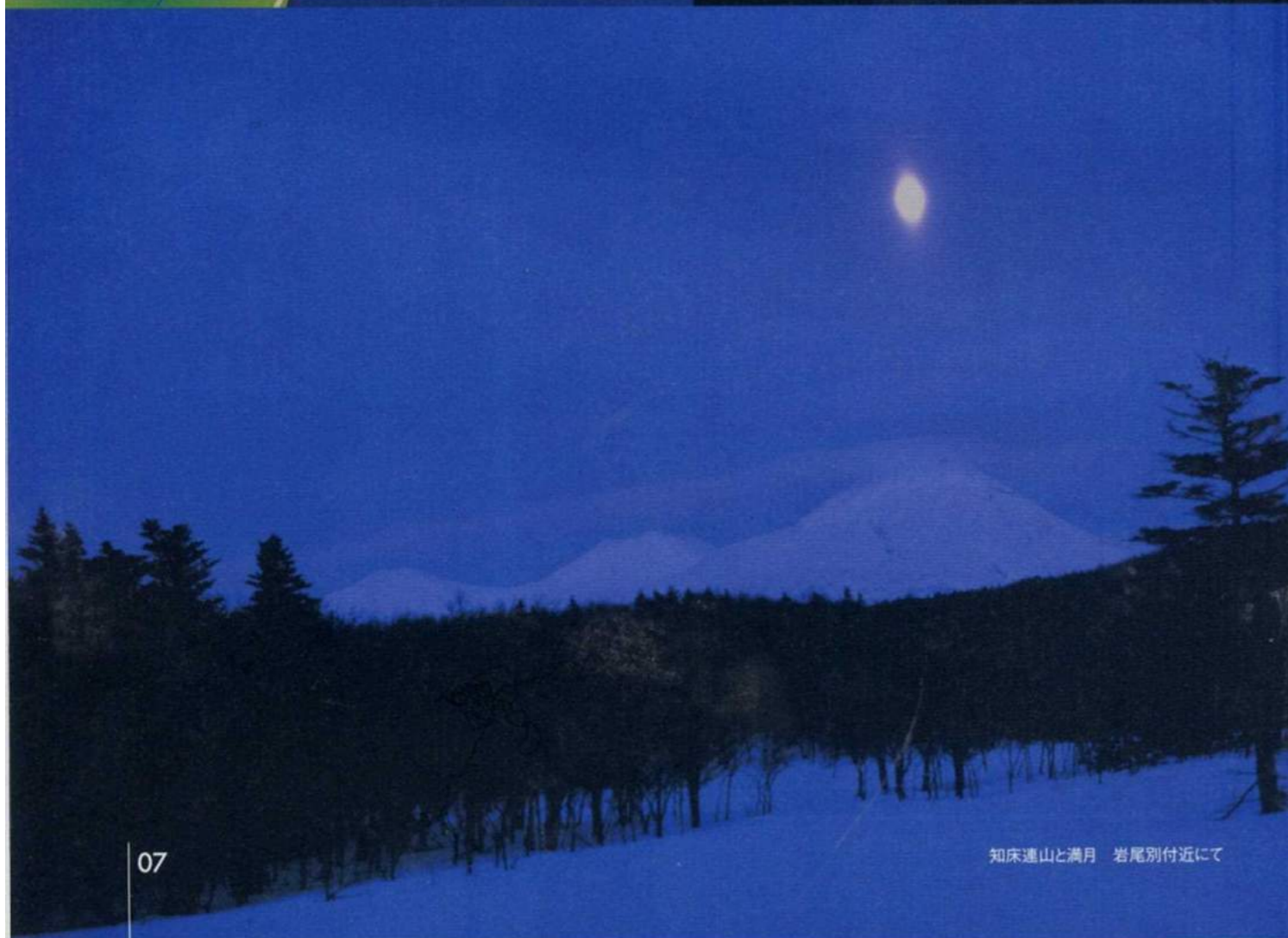
志水哲也(写真家)。1965年神奈川県横浜市生まれ。知床から屋久島までを「日本の幻ノ滝」というテーマで今年の秋に写真展と写真集で発表予定。現在は次の目標として屋久島を取材中。写真集は「黒部」山と渓谷社刊、「黒部物語」みすず書房刊、「黒部からの言葉(三部作)」桂書房刊など。

日本の幻ノ滝は知床半島、白神山地、飯豊連峰、奥利根、尾瀬、菅平、立山、黒部、大台ヶ原、屋久島の10回連載します。

知床半島



モルゲンロートの国後島 相泊にて



知床連山と満月 岩尾別付近にて

凍風

山は雪と風がすべてを支配する極寒地帯だった。風と雪がシユカブラやエビのシツボを描き、吹きさらしの稜線はアイゼンの爪が刺さらぬほど硬く凍りつく。1992年2月、知床半島全山を独りで歩いた光景。

雪煙が渦巻き、うなりをあげて襲いかかってくる。その中に入ると粉雪を伴った乱流が吹き巻いており、目を開けていることもできなければ、息もつけない。うずくまり、顔を下に向け、両手で額を覆って、プリザードが去るのをただただ耐え忍ぶ。

遠音別岳から知西別岳の稜線では前後左右真っ白の暴風雪のなか、地図とコンパス、そして高度計だけを頼りに、現在地も確認できないまま丸二日間歩いた。プリキ缶のように堅く凍った目出帽は風を防ぐだけで、頬の感覚は徐々に麻痺し、頬が凍ってきているのが分

かる。顔の凍傷ぐらいは甘受しなれば、歩き通すことはできないだろう。

凄まじい風につかまった。一瞬、僕の身体が宙に浮く。自然の凄みの前で人間はこんなにも非力なのか。ここではこの風に耐えたモノだけが生き、飛ばされたモノは死ぬ、分かりやすい自然淘汰、掟生きうるモノの本来の在り方。そんななか、歩き続けることで僕は自分が生きていることを純粹に、無条件に感じていた。

それは現代、我々が日常の生活ではなかなか感じられない、というより忘れていた感覚、ヒトの存在そのものであったように思う。

右に青い海、左に白い海(流水原)、ここが半島で、その先端の岬を目指しているのが分かる。一瞬の晴れ間に国後島が見える。左右から徐々に海が近づいてきて、やがて前途は海だけとなった。

流水原 宇登呂にて

日本の幻ノ滝 第2回

白神山地 ヒグラシの滝

写真・文 志水哲也

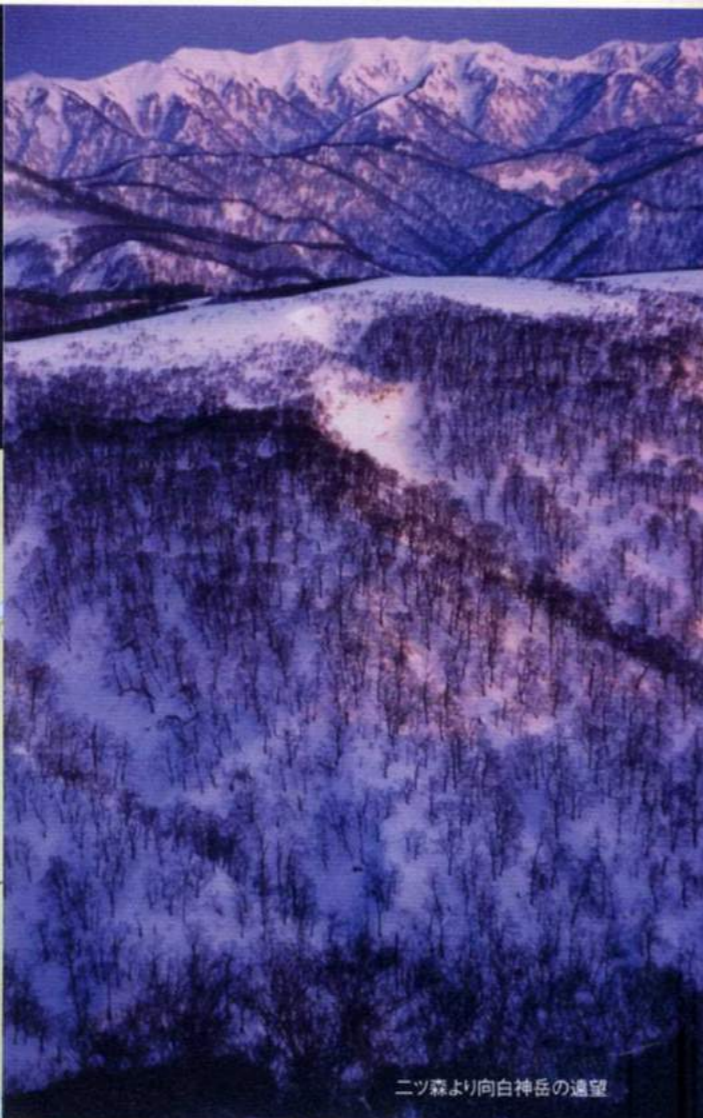
白神岳から山地の真っ只中の原生林を割って日本海に流れ下る流
程約20キロの追良瀬川。翹つてい
くと、その源流部にスタレ条に落
ちる優美な滝・ヒグラシの滝(落差
80m)が現れる。白神には他に暗門
ノ滝、クロクマの滝といった名勝
もあるが、それらにスケール容姿
共に勝るとも劣らぬ滝でありなが
ら、一般にはほとんど見た人がいな
い秘瀑である。



Profile

志水哲也(写真家)。1965年神奈川県横浜市生まれ。知床から屋久島までを「日本の幻ノ滝」というテーマで今年の秋に写真展と写真集で発表予定。現在は次の目標として屋久島取材中。写真集は『黒部』山と溪谷社刊、『黒部物語』みすず書房刊、『黒部からの言葉(三部作)』桂書房刊など。

日本の幻ノ滝は知床半島、白神山地、飯豊連峰、奥利根、尾瀬、菅平、立山、黒部、大台ヶ原、屋久島の10回連載します。



ニツ森より向白神岳の遠望



空を覆うブナ林 追良瀬川にて



樹の一生

一本の樹から無数の種子が飛び立った。風によって、地形によって、天気によって、種子はそれぞれ違う道を歩んでいく。
その一つが、地面に根つき、初々しく芽吹き、みずみずしい若葉をつける。希望と夢に満ちた生命の誕生。そして、夏が来て、秋が来て、冬が来て、めぐる季節の中で梢を繁らせていく。
ロマンを抱き、可能性を信じ、生き方を疑い、世の中に反発することと生きている意味を見つけようとした自分の少年時代を思う。
ある時は幹が折れるのではというばかりの強風にあおられ、ある時は息もできぬほどの雨雪に叩かれ、またある時はいつ襲ってくるか分からない落雷に怯え、冬には来る日も来る日も重くのしかかってくる雪の重みに耐えた。それらを年輪に刻みながら、次第に大木

へと成長していく。
人はそんな現実の荒波によって、若き日の夢や希望はいつの間にか薄れ、ただ生きぬくことに精一杯になっっていくことが多い。
人の年輪とはなんだろう。強風や落雷や雪が人知れず残す足跡。そして、ある時、ふいに死がやってくる。
樹は生きたようにしか残れないという。どのように生きたかを余すことなくその姿にとどめている。死んだ後、ある樹はすぐに枯れ朽ち、ある樹は何百年と白骨樹のオブジェとなって残る。
その白骨樹は、歩道からも外れ、笹藪の樹海の真っ只中に、人知れず、紺碧の空に夕陽を浴び、骨太に凛々しく立っていた。
その樹を見ていると、なんだか生きる意味など、いろいろなように思えてくるのだった。

留山のブナ

飯豊連峰

梅花皮大滝

かいらぎ



夏はお花畑と残雪に彩られた、た
おやかな山が広がる飯豊連峰。冬は
日本屈指の豪雪地帯となり、底雪崩
が山肌を削り、岩をむき出しにした
巨大滝を造る。それが梅花皮大滝だ。
左岸を高度差600mヤブこぎ
して滝上に出て、水流通しを、滝の
内部を撮影しながら、およそ300
mを懸垂下降で下った。



Profile

志水哲也(写真家)。1965年神奈川県横浜市生まれ。知床から屋久島までを「日本の幻ノ滝」というテーマで今年の秋に写真展と写真集で発表予定。現在は次の目標として屋久島取材中。写真集は『黒部』山と渓谷社刊、『黒部物語』みすず書房刊、『黒部からの言葉(三部作)』桂書房刊など。

日本の幻ノ滝は知床半島、白神山地、飯豊連峰、奥利根、尾瀬、菅平、立山、黒部、大台ヶ原、屋久島の10回連載します。



石転び沢源頭



飯豊本山付近より 大日岳



雪庇

自分の真下でピシッと小さく鈍い音がした。なんだろうかと思っ
て足下を見た瞬間、その雪面が音
もなく裂け、みるみる開いていく。
全身に戦慄が走る。

一瞬後、僕は数百トンの巨大な
雪庇もろとも、一個の雪崩となっ
て200mを落ちていった。

止まれ、止まってくれ、と必死に
思うのだが、どんどん加速がつい
てきて「もうダメだ、死ぬのか」と
いう思いが頭をかすめた。苦しく
て開けた口の中に雪が一杯入って
きた。まもなく窒息して意識がな
くなり、何も分からなのまま死ぬ
のだろうとあきらめかけた。

だが僕は、窒息死する前に止ま
った。むせかえりつつ雪を吐き出
し、登り返し始めた。傾斜60度の胸
まで没する雪壁を35キロの荷を背
負って――。

しかし、その途中にも斜面は幾

度となく雪崩れ、一度はザックと
別になって再び流されたが、死に
もの狂いで登っていった。

稜線直下まで上がった僕は、愕
然とした。稜線はどこもいまにも
崩壊しそうな雪庇が大きく張り出
し、どこからも乗り越すことがで
きそうになかったのだ。

ここにいたらどっちみち命はな
いのだ。覚悟を決め、際どいバラ
ンスでオーバーハングした雪庇を乗
っ越して稜線に出た。

僕はその場に座りこみ「もう山
は終わりだ。死にたくない」と繰り返
し繰り返しつぶやいていた。落
ちてからすでに7時間を経過して
いた。

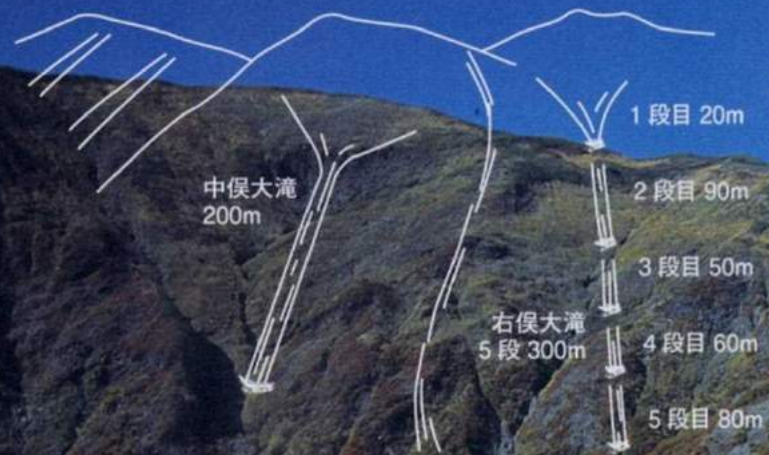
いまなお、思い出しても怖くな
る。教訓にするなどとも思えない。
ただ、忘れてしまいたい。僕はあの
とき以来、山に対して確実に臆病
に、そして弱くなった。

大日岳(空撮)

奥利根

越後沢の大滝

写真・文 志水哲也



利根川の名の由来は険しい山々にある「尖嶺」が多く、そこから流れ出す川だから「利根川」といい、奥利根湖の上流を「奥利根」という。奥利根は万年雪が一年中溶けることなく不安定に谷底を覆い、源流は大水上山につきあっている。その支流越後沢の上流は岩壁が横に大きく広がり、巨大滝が二つかかる。右俣に落ちるのは「八百間の大滝」、中俣に落ちるのは「幻の大滝」と呼ばれる。

Profile

志水哲也 (写真家)

1965年横浜市生まれ。1982年から1995年位まで、国内外の単独登攀、長期縦走を行う。1997年に黒部溪谷の玄関口・黒部市宇奈月に移住。2002年頃から写真家としての活動を開始。写真集は「黒部」山と溪谷社刊、「黒部物語」みすず書房刊、「黒部からの言葉」三部作、桂書房刊がある。写真展は「黒部」2002年6月ペンタックスフォーラムを皮切りに、毎年随所で開催している。現在は次のテーマとして屋久島取材している。
http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/

日本の幻ノ滝は知床半島、白神山地、飯豊連峰、奥利根、尾瀬、菅平、立山、黒部、大台ヶ原、屋久島の10回連載します。



奥利根の源流にかかる大利根



奥利根本谷源流 大水上山上空より(空撮)

出版記念写真展「日本の幻の滝」

●東京展:新宿ペンタックスフォーラム

10月10日(水)~22日(月)…16日は休館

163-0690 東京都新宿区西新宿

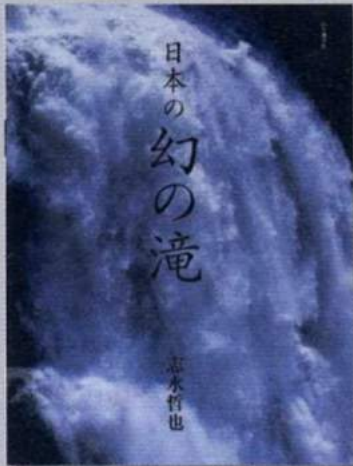
新宿センタービル中地下1階 ☎03-3348-2941

●富山展:NHKとやまぎやらりー

11月15日(木)~20日(火)

930-8502 富山市新総曲輪3-1 ☎076-444-6630(代)

※以降、各地を巡回予定



写真集『日本の幻の滝』
山と溪谷社9月5日刊
A4変形
並製144頁(カラー128頁)
税込3,780円



奥利根オイックイのスノーブリ

よく懂れたものだ。今度生まれ変わるなら鳥になって、三次元の空間を思いのままに飛び回ってみたいと――。

15年ほど前、北海道の襟裳岬から日高、大雪十勝、北見山地という北海道の脊梁670キロを五カ月ほどかけて山スキーで縦断していたとき、山脈を鮮やかに飛び越えていく渡り鳥、頂上を悠々と旋回するワシやタカ。何日も深いラッセルを続け、やっとの思いでたどり着いた山稜をひとつ飛びしていく鳥たちの旅の自由さと困難さを感じた。彼らはこの雄大な山々、陰阻な溪谷、密生した森林をリーダーのように捉えて飛びながら旅を続けていくのだろう。この三年間に飯豊、奥利根、尾瀬、立山、黒部を何度かヘリコプターから俯瞰した。滝は岩壁の影になったりして

見える角度が限られ、地上から写真を撮ることに限界がある。また、いままで滝に、水に近寄ることで、滝を表現してきたが「樹を見て森を見ない」ではないが、その真っ只中に分け入ってはいけ、むしろ分りにくいものもあると思ったからである。離れた場所から山と滝との関わりを見てみたくなったのだ。

そして、そこには確かに空からではなくては見る事ができない世界があった。長い年月、浸食によって削られてできたV字谷、雪崩や多雨によって出現した巨大滝や崩壊、森林と溪谷の織りなす関係……。滝は川の一部で、山、湿原、川、海がどのように関係しているか、改めて思い知らされた。そして、地球や大地の凄みや不思議さに、思いを馳せたのだった。

鳥瞰

日本の幻ノ滝 第5回

尾瀬 三条の滝

写真・文 志水哲也

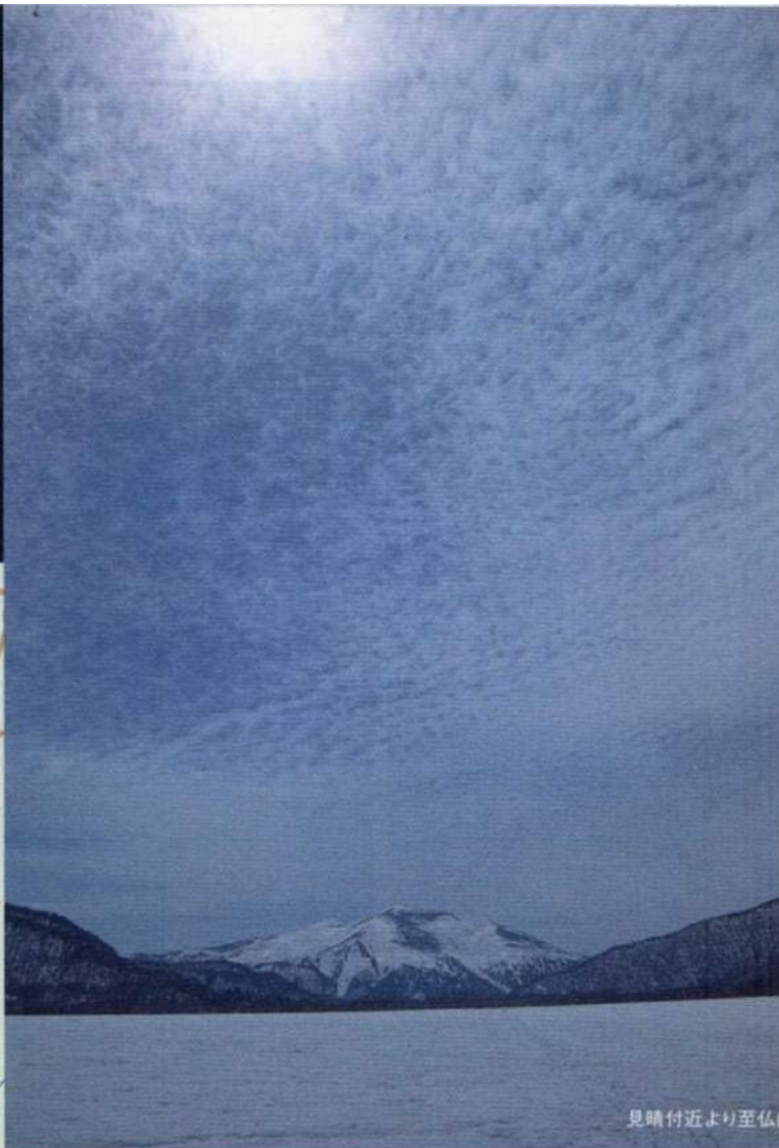
日本最大の高層湿原「尾瀬ヶ原」。
広く知られたこの湿原には様々な
顔があるが、水がすべてを彩ってい
る。その水を集めて流下する先に三
条の滝がかかっている。日本全国、
有名無名いろいろな滝を見てきた
が、やはり三条の滝は日本一の豪快
な滝だと思ふ。雪解けで水量が最大
になった5月、水煙が吹き荒れる瀑
水に朝日が当たりはじめると、大
地のエネルギーを漲らせ、凄まじい
貌をみせる。

Profile

志水哲也 (写真家)

1965年横浜市生まれ。1982年から1995年位まで、国内外の単独登山、長期縦走を行う。1997年に黒部深谷の玄関口・黒部市宇奈月に移住。2002年頃から写真家としての活動を開始。写真集は「黒部」山と溪谷社刊、「黒部物語」みすず書房刊、「黒部からの言葉」三部作、桂書房刊がある。写真展は「黒部」2002年6月ペンタックスフォーラムを皮切りに、毎年随所で開催している。現在は次のテーマとして屋久島を取材している。
http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/

日本の幻ノ滝は知床半島、白神山地、飯豊連峰、奥利根、尾瀬、菅平、立山、黒部、大台ヶ原、屋久島の10回連載します。



見晴付近より至仏山



尾瀬ヶ原と至仏山 中田代にて



日が当たっていない三条の滝の滝壺は、広々とした尾瀬ヶ原とは違って変わって、奈落の底のように見えた。灌木にロープを結び、滝壺に向かって垂直の岩壁を懸垂下降していくと、50mロープの末端は心もとなく宙に揺れていた。もう一本のロープを結びつけ、下っていく。水量が雪解けで最大になる5月下旬だから、滝下は台風のように吹き荒れていた。

思い出す。挑戦するものは変わったけれど、自然に對し、また自分に對し、一対一で向かい合わなければならぬ。それはいま取り組んでいることと同じであった。

晴天の予報日を選んだのに……。太陽が瀑水に逆光で当たる瞬間、薄雲が太陽を覆った。岩壁に垂れたロープを登り返して、木道をとぼとぼ歩いてテントに戻る。

翌日も、同じ時刻にそれをした。誰も見たことがない一瞬の風景を捉えてみたい。

そして、一瞬は現れた。期待通りの光線。光と瀑水の狂乱。銀鱗のように光るきらめき……、シャッターを夢中で押す自分がいた。

尾瀬ヶ原と燧ヶ岳 中田代にて

